

看護実践研究センター報告書

平成 30 年度

目 次

I	はじめに	1
II	平成 30 年度事業報告	2
	1. なごや看護生涯学習セミナー	2
	【看護研究セミナー】	
	(1) 看護研究いろはの「い」	
	(2) 看護研究いろはの「ろ」	
	(3) 看護研究いろはの「は」	
	【看護実践セミナー】	
	(1) 急性期の呼吸・循環の管理と輸液の考え方	
	(2) 患者急変対応「何か変、と思ったとき・・・」	
	(3) ラップ（元気回復行動プラン：WRAP®）体験クラスワークショップ	
	2. なごや看護生涯学習公開講演会	15
	3. 地域連携セミナー	18
	4. 看護研究サポート	20
	5. 昭和生涯学習センター共催講座	22
III	今後の課題	24

名古屋市立大学看護学部

名古屋市立大学病院看護部

I はじめに

名古屋市立大学看護学部と名古屋市立大学病院看護部が協力して設置した看護実践研究センター（以下、本センター）は7年目を迎えた。しかし、その前身である看護学部地域貢献委員会における事業も含めると、看護学部と病院看護部の協働による社会貢献は13年目となる。本年度もこれまでと同様に取り組み、なごや看護生涯学習セミナー、なごや看護生涯学習公開講演会、地域連携セミナー、看護研究サポート、昭和生涯学習センター共催講座を開催した。各事業の企画に際しては、本センター運営委員の意見や前年度のアンケート結果をもとに担当者が主体的に取り組んでいる。その結果、学外講師、看護学部教員、看護部看護師の多大な協力を得て参加者にとって有意義な事業となっている。その詳細は以下に述べるとおりである。

一方、本報告書は、平成26年度から29年度までの4年間、看護学部紀要の巻末に掲載されていた。しかし、昨年度の報告書で述べたように平成30年4月になごや看護学会が設立されることとなった。そのため看護学部紀要は終了し、看護学部教員の研究成果等はなごや看護学会誌で公表されることとなった。これに伴い、本報告書は、本センターホームページのみでの公開となったが、ホームページの利点によって、より多くの方々の目に触れることを期待したい。

今後もセンターが実施する社会貢献活動にご理解、ご協力いただければ幸いである。

Ⅱ 平成 30 年度事業報告

1. なごや看護生涯学習セミナー

担当：杉浦和子、宮内義明

「なごや看護生涯学習セミナー」は、愛知県内の保健医療職者を対象に、より専門性を高め地域住民へのサービス寄与につなげることを目的とした地域貢献事業である。本年度は看護研究セミナー3件、看護実践セミナー3件を開催した。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
4月	セミナー実施の承認・検討 テーマおよびセミナー担当者募集開始
5月	テーマ申込み状況の把握 全テーマの開催日程、場所決定、教室予約
6月	セミナー当日の役割分担、アンケートの検討 参加申込方法（メール申込、FAX 申込）、受講証明書配布方法の検討 募集人数、受講料、応募結果案内方法の決定 チラシの決定 チラシ配布先、配布枚数、印刷枚数の決定 受講カード、受講証明書の検討 参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表の作成開始
7月	チラシ印刷発注 チラシ発送（病院、名古屋市保健センター、老人保健施設及び精神保健福祉センター、愛知県看護協会など合計 139 箇所） 看護実践研究センターホームページで告知開始 参加者募集開始、受講生に受講カードの送付
8月	セミナー申込み締切（各セミナーの日程により申込み締切を延長） 事務に領収書の依頼 情報処理室のパソコン使用 ID カード準備（事務へ依頼）
9月 ～12月	各セミナー実施 実施前：受講者数の決定、受講者リスト作成、参加申込状況の報告、講師へ連絡、セミナー当日の委員の業務内容の概要説明、配布資料印刷 実施後：アンケート集計、看護学部ホームページへ開催報告掲載

	<p>【看護研究セミナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看護研究いろはの「い」 第1回 (9/6) 第2回 (9/11) ・看護研究いろはの「ろ」 (10/13) ・看護研究いろはの「は」 第1回 (10/15) 第2回 (10/22) <p>【看護実践セミナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・急性期の呼吸・循環の管理と輸液の考え方 第1回 (10/25) 第2回 (11/8) 第3回 (11/15) ・患者急変対応「何か変、と思ったとき・・・」 (12/1) ・ラップ (元気回復行動プラン：WRAP®) 体験クラスワークショップ (12/9)
--	--

2) 事業の実施状況

【看護研究セミナー】

(1) 看護研究いろはの「い」

講師：門間晶子 (名古屋市立大学看護学部・教授)

日時：第1回 平成30年9月6日 (木) 18時30分～20時30分

第2回 平成30年9月11日 (火) 18時30分～20時30分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 410 講義室

募集人数：20名

参加者：9月6日 (木) 11名、9月11日 (火) 10名

参加費：2,000円



〈内 容〉

昨年度同様、1回あたり2時間の講義を2回シリーズで実施した。到達目標は、①看護研究の要素や進め方に関する基本的事項の理解、②日常の実践における疑問の文章化、研究疑問としての表現 ③研究論文を読み、文献を検討する際の視点や考え方を具体的に理解 ④文献検討の意義と基本的な方法の理解 ⑤研究計画書の構成と要素についての理解の5点である。これに沿った講義やグループワークを行った。

1回目には、まず看護研究とは何かについて、看護研究の定義・特徴・役割等を解説され、次に、研究疑問（リサーチ・クエスチョン）とは何か、それを洗練するヒント、研究デザインとの関連について伝えた。続いて、問題意識の明確化から論文の公表に至る研究のプロセスの全体像を解説し、その最初のステップを丁寧に踏むことの大切さが伝えられた。具体的にワークシートを用いながら、「漠然とした疑問」を書き出してもらい、2～3人で組になってそれらをリサーチ・クエスチョンの形で記述するにはどうしたらよいかを話し合う機会が設けられた。2回目の講義で扱うための論文2点（量的研究・質的研究）、文献検討のためのシートが配布された。

2回目は、看護研究を読み・味わい・そこから学ぶために、前回配付した2件の研究論文を読んだ意見交換を行った。その後、論文の種類、種別による査読基準の違いなどを解説し、学習につながりやすい論文を探すヒントにもつなげた。続いて文献検討・文献レビューに関する用語の定義、文献検討の目的、文献検索方法、絞込みのポイント、文献検討結果のまとめ方について解説した。時間の関係から、受講者の希望を聞き、目標②「リサーチ・クエスチョンの洗練」よりは、目標③「研究論文の読み方」に焦点を当てて進めた。最後に、研究計画書について、その役割、要素、作成例について説明した。

日常の疑問をすぐ書き起こせる人、文献検討シートに書き込んでくる人、臨床経験2年目で上司に言われてきたが研究については具体的な問題意識がもてていない人など、さまざまであった。すべての受講者のニーズに応えることが難しく感じられた。

〈アンケート結果〉

最終日参加者10名のうち、8名からアンケートの回答があった（回収率80%）。セミナー参加動機は、「新しい知識を得る」2名（25.0%）、「必要に迫られて」2名（25.0%）、「興味・関心があった」2名（25.0%）などであった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」者は5名（62.5%）で、「どちらかといえば難しかった」「難しかった」者は3名（37.5%）であった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・リサーチ・クエスチョンが、研究にするとどうなるのかのイメージができた。
- ・具体的に自分が取り組んでいくことを考えてみると難しいと感じた。
- ・看護研究を行える環境下にはないが興味関心のある分野の論文を読み学ぶための学びは得られたと思う。なるべく多くの原著論文を読み味わいたい。

(2) 看護研究いろはの「ろ」

講 師：山田紀代美（名古屋市立大学看護学部・教授）

日 時：平成30年10月13日（土）9時30分～15時30分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 401 情報処理室、402 講義室

募集人数：15名

参加者：6名

参加費：3,000円



〈内 容〉

今年統計学を用いる意味、変数とデータ収集について学習後、データの入力方法及びSPSSを用いた統計分析に関する講習を行った。午前、午後で合計5時間のプログラムとし、午前の前半では、量的研究を行うにあたって基本となる内容、1) 統計学を用いる意味、2) 変数とデータについて講義を行い、後半ではSPSSを用いて、1)データと変数の入力、変数の変換、2) 記述統計 3)推測統計について模擬データを用いて実際に分析を行った。午後は、模擬データを用いて、午前中の分析方法をもとに、各自で課題を実施した。今回は、SPSS未経験者が対象であったため、できるだけ基礎知識の提供から始めるように工夫した。

概要は以下の通りである。

① 統計学の意味

量的研究における統計学の意味について概説した。

② 変数とデータについて

データの種類による記述統計の方法について概説した。

③ SPSSの演習

(1)変数とデータ

SPSSにおける直接的なデータ入力と外部データの取り込みについて実施した。

さらに、変数画面にて変数の入力を実施した。

(2)記述統計

模擬データをもとに、度数分布、記述統計（平均値、分散、標準偏差）を計算した。

さらに、対応の無いt検定及び、相関、クロス検定を、データの性質に合わせて用いることを説明後、実際に分析を実施した。

また、データの正規性の有無により、パラメトリック、ノンパラメトリック検定を行うことを説明後に、実際に分析を行った。

(3)要因探索の実際

上記の(1)と(2)の演習後、模擬データを用いて、「転倒」に関連する変数を探索する演習を実施し、各自の結果をもとにレポートを作成した。

今年度は、受講にあたり指定図書を購入することを条件としたため、SPSSを使用する意欲の高い受講者が集まったものとする。そのために、受講者のパソコンスキルが高い上に理解も早く、演習もスムーズに進めることができた。一方で、例年一定数存在するお話し希望の参加は除かれた可能性もあり、参加者人数が少なかったものと推察する。ターゲットをどこにするのか次年度の課題と考える。



〈アンケート結果〉

参加者6名の全員からアンケートの回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機で最も多かったものは「新しい知識を得る」の4名（66.7%）で、次いで「興味・関心があった」2名（33.3%）であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」者は1名（16.7%）で、「どちらかといえば難しかった」「難しかった」者は5名（83.3%）であった。自由記載では、参加者のレベルが異なるため次のような様々な意見が挙げられた。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ 大学時代の知識をほとんど忘れていたので、分析結果を読むのが難しかった。
- ・ SPSSがないので日頃出来ないが看護部のパソコンでやってみたい。
- ・ 学習を積んで理解して今後使用の際に思い出すと今後活かす事が出来る様になると思う。

(3) 看護研究いろはの「は」

講師：益田美津美（名古屋市立大学看護学部・准教授）

日時：第1回 平成30年10月15日（月）18時30分～20時30分

第2回 平成30年10月22日（月）18時30分～20時30分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 410 講義室

募集人数：10名

参加者：10月15日（月）5名、10月22日（月）4名

参加費：2,000円



〈内 容〉

今年度、はじめての試みとして、質的研究に関する講習を行った。

対象を「これから質的研究を行おうとしている看護保健職者」とし、質的研究とはどのようなものかを理解し、実際にデータ収集とデータ分析を行ってみることを目標に、講義1回、演習1回の合計2回行った。対象者のレディネスは、これまでに質的研究のみならず、看護研究を行ったことがない方々であった。

10名を定員としていたが、予想より少ない5名の参加であったため、受講者と対話しながらフレキシブルに行われた。

概要は以下の通りである。

① 質的研究とは（講義）

質的研究のプロセスを概説した上で、質的研究の様々な方法について紹介された。また、研究目的に沿ったデータ収集の仕方、データ分析の手順、データ収集・分析にあたって留意すべきことなどについて講義がなされた。FAQとして、質的研究に関する主な疑問について提示された。

② データ収集・データ分析の実際（演習）

半構成的インタビューを2人1組で実際に行い、意見交換し、その後、事前に準備した3名分の逐語録に基づき、2人1組でデータ分析の演習が行われた。コードをハンドソートで分類・統合し、カテゴリー化した。次に抽出されたカテゴリーごとにストーリーが見えてきた段階で、発表を行うという形で進められた。発表後は、各グループから抽出されたカテゴリーの共通点、相違点等について確認し、意見交換がなされた。データ分析中に注意すべき点については、講師よりフィードバックされた。

〈アンケート結果〉

最終日参加者4名の全員からアンケートの回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機で多かったものは「自分の看護のレベル・アップ」2名（50.0%）、「必要に迫られて」2名（50.0%）であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」が大半であったが「どちらかといえば難しかった」という回答もあった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ 質的研究を行う場合、今回の分類を実際に行ってみたいと思う。
- ・ 実際に分類をしてやってみる方がわかりやすかったが、もう少し考える時間があればよかったと思う。
- ・ 今回受講して、これまで考えていた内容は質的研究ではないということに気づくことができた。テーマは、まだ決まっていないが、研究に活かされるよう頑張りたい。

【看護実践セミナー】

(1) 急性期の呼吸・循環の管理と輸液の考え方

講師：薊 隆文（名古屋市立大学看護学部・教授）

日時：第1回 平成30年10月25日（木）18時30分～20時30分

第2回 平成30年11月8日（木）18時30分～20時30分

第3回 平成30年11月15日（木）18時30分～20時30分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 410 講義室

募集人数：20名

参加者：10月25日（木）15名、11月8日（木）16名、11月9日（木）13名

参加費：3,000円



〈内 容〉

① 急性呼吸不全の病態の理解

急性呼吸不全を知るうえで必要な呼吸器の解剖・生理を概説し、4つの低酸素血症になる機序を解説し、症例をあげて説明した。

② 急性循環不全の病態の理解

急性循環不全を知るうえで必要な循環器の解剖・生理を概説し、ショックと心不全の機序を解説し、症例をあげて説明した。

③ 急性呼吸不全・急性循環不全に対する輸液の考え方

輸液療法を知るうえで必要な基本的な体液・輸液について概説し、心不全・ショック・呼吸不全について症例をあげて輸液の考え方を説明した。

〈アンケート結果〉

最終日参加者13名の全員からアンケートの回答があった（回収率100%）。セミナー参加動機は「自分の看護のレベル・アップ」「新しい知識を得る」「興味・関心があった」の順であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」と「どちらかといえば難しかった」「難しかった」という回答が半々であった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・呼吸、循環の基本的な知識を学べ、再確認ができた。単なる暗記ではなく理論的に学べて納得できたので今後活かせられると思う。
- ・急性呼吸不全が難しかった。

(2) 患者急変対応開催「何か変、と思ったとき…」

講師：加藤紀子氏、清水真名美氏、寺澤涼子氏、岩田麻衣子氏、稲尾景子氏
(名古屋市立大学病院救急看護・集中ケア認定看護師)

日時：平成 30 年 12 月 1 日 (土) 9 時 30 分～16 時 30 分

場所：名古屋市立大学病院 臨床シミュレーションセンター

募集人数：20 名

参加者：17 名

参加費：3,000 円



〈内 容〉

例年、参加申し込みが多く好評のセミナーであるため今年度も開催した。

患者が急変する 6～8 時間前には何らかの兆候がでていたといわれ、本セミナーでは、受講生が患者の急変前兆候に気づき、医師などに報告することで、防ぎ得た心停止・防ぎ得た後遺障害を防ぐことを目的としている。患者急変対応コース for Nurse ガイドブックによれば、「急変とは、予測を超えた状態の変化をいい、その程度は観察者の予測範囲によって異なる。一般にはその変化の方向性は、病態（症状）の悪化を意味し、何らかの医療処置を必要とする場合を表現している」と定義されている。私たち看護師がその変化を見逃さないようにするためには、患者の病態変化に気づき、対応の必要性を判断する能力、そして、医師などに迅速かつ適切に報告する能力が求められる。

上記のように急変は観察者の予測範囲によって異なるため、常日頃から急変に備えて観察する能力を向上させる努力が必要である。そして、その能力を用いて患者と接する度に

迅速評価を行うことが大切である。迅速評価とは、「最初に出会った数秒間で、呼吸、循環、意識・外見を五感のみを使って、アセスメントする」ことである。そこで必要なことは、患者に「死に結び付く可能性のある危険な兆候」があるのかどうかを判断することである。アセスメントの結果、心肺停止状態と判断した場合、BLSを実施する。心肺停止状態になっていないが、危険な兆候があると判断した場合、ナースコールで応援要請を行いながら、さらに詳しく患者の状態を把握するために一次評価を行っていく。一次評価では、簡単な器具（血圧計、生体情報モニタ、聴診器、ペンライト、体温計）を用いて視診、触診、聴診で、命を支える「A：気道」「B：呼吸」「C：循環」「D：意識」「E：外表・体温」に問題ないか素早く観察を行う。すなわち、患者が心停止にどの程度近づいているかを判断するために、「A・B・C・D・E」の視点で評価するのである。そして、患者の状態を観察しながら、患者に何が起きているのかアセスメントを行い、SBARを用いた報告を医師などに行う。

これらの方法を知り、実践できるようになるために、まず観察のポイントや観察方法を講師による講義が行われた。その後、講義内容の理解を深めるために机上シミュレーションによる演習、実働シミュレーションで人形を使用し、学んだ内容を実践してもらうという段階を内容で進められた。



〈アンケート結果〉

参加者 17 名のうち、17 名からアンケートの回答があった（回収率 100%）。セミナー参加動機で最も多かったものは「自分の看護のレベル・アップ」の 11 名（64.7%）であった。また、セミナーの内容は、全員が「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ 苦手意識のあった急変対応は、急変に至る前に何か兆候を見つけるぞという意識に変わった。

(3) ラップ（元気回復行動プラン：WRAP®）体験クラスワークショップ

講師：小川雅代（名古屋市立大学看護学部・講師）

田端恭兵氏（名古屋市立大学病院・看護師）

日時：平成30年12月9日（日）13時～17時

場所：名古屋市立大学看護学部棟 410 講義室

募集人数：20名

参加者：17名

参加費：2,000円



〈内 容〉

① 目的

本セミナーの目的は、看護保健福祉職者に WRAP を体験してもらうことである。参加者に、まず WRAP 活用に必要なリカバリーに関する知識を提供し、その後 WRAP の紹介を行い、WRAP クラスを体験してもらった。

WRAP は精神障害を有する当事者主体で開発されたものであり、現在では、病気の有無にかかわらず誰もが自分で自分を元気にする（リカバリー）ツールとして広がってきている。WRAP の研修会などを見ていて、当事者はスムーズに WRAP を理解している様子であるが、それに反して医療職者は WRAP を理解することが難しい人が一部いることに気づいた。WRAP の活用にはリカバリーを理解しておく必要があると考え、以下のようなワークショップが企画された。

② 講義 1. リカバリーと WRAP

精神障害についての理解、精神障害は病理だけにとどまらず生活障害や社会的不利を引き起こす。リカバリーは、当事者自身によって自覚される、生活の復活や生活の充実などのプロセスであり、一人で成し遂げられるものではなく、支援と連携が必要である。リカバリーが人生の目的であり、病気の管理や健康はそれを達成するための手段である。支援者は、対象者がリカバリーし、彼ら自身の人生を変換する能力を持っていると信じるこ

とが大切である。WRAP は不快で苦痛を伴う困難な状態を自分でチェックして、プランに沿った対処方法を実行することでそのような困難を軽減、改善あるいは解消するための系統だったシステムである。

③ 講義 2. WRAP やってみた

WRAP の目的は、リカバリーの方法、セルフマネジメント技術・戦略を身につけることである。いつも元気を目指さなければならないのではなく、「いい感じ」の自分を保てるようにするのが WRAP である。

WRAP の作り方について実例を紹介しながら説明した。

④ WRAP クラス体験

以下の内容について体験してもらった。

チェックイン：WRAP クラスに入るといふところの準備をする。

呼ばれたい名前：WRAP では呼ばれたい名前（こんな存在でありたいという気持ちの表れ）で自己紹介を行う。

安心のための同意：WRAP クラスに安心して参加できるように参加者全員で作成する。

いい感じの自分：「いい感じの自分」について思い浮かんだことを発表する。

元気に役立つ道具箱：「いい感じの自分」でいるために必要なことについてアイデアを発表する。



〈アンケート結果〉

参加者 17 名の全員からアンケートの回答があった（回収率 100%）。セミナー参加動機で最も多かったのは「興味・関心があった」の 10 名（58.8%）であった。また、セミナーの内容は、全員が「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・地域社会で生きていくために WRAP がある事を知ったので、今後の活動に WRAP を活かしていきたい。

- ・患者さんとやってみたいと思った。
- ・在宅では利用者さまだけでなく家族との関わりも濃いので活かしていきたい。
- ・全てにおいて活かすことができると感じる。
- ・時間配分や例えなど、パワーポイント含め非常に良かったです。

3) 課題

今年度は、6件のセミナーを開催した。看護研究については、今年度は新たに量的・質的研究における手法を学べるようにした。量的研究は、申し込みの段階でSPSSの使用経験の確認や講師による参考図書の提示などにより、レディネスやレベルの違いに対応できるよう調整したことで、より充実したセミナーとなった。看護実践セミナーについては、新たなテーマと継続的なテーマの両方あるなかで参加者から高い評価を受けたことは、参加者のニーズに沿ったものであったと考える。セミナーによって参加者数に幅がみられたが、各講師の尽力により、人数に合わせた有意義なセミナーとなった。

次年度のセミナーでは一定の人数が確保できるよう、開催日程や参加者の要望も取り入れながらセミナーのテーマを決定していく必要がある。

2. なごや看護生涯学習公開講演会

担当：益田美津美、小川雅代、吉松由子

「なごや看護生涯学習公開講演会」は、地域の保健医療職者が求めている知識、情報、話題などを提供し、結果として市民の皆様に対する医療の質向上に貢献することを目的としている。その時々々の医療情勢をふまえてテーマを選定し、その分野で活躍中の講師を招聘し、毎年1回開催している。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
2月	テーマと講師選定について検討
4月	担当者の選出、テーマ提起
5月	テーマと講師選定について検討、交渉 チラシ（案）の作成 講師決定、開催日時決定、会場予約
6月	公文書発送
7月	チラシ送付先、印刷枚数の検討 チラシ原稿確認、印刷発注（1,200部） チラシ納品、チラシ発送 募集開始（看護実践研究センターホームページで告知開始）
8月	封筒宛名印刷
10月	当日のスケジュール、役割分担の検討 広報なごや1月号掲載依頼
11月	参加申し込み状況、準備状況、アンケート内容の確認 名市大病院前会場案内看板、ステージ講師紹介、アンケート印刷 講師への最終確認書類の発送 企画広報課へプレスリリース依頼
1月	全学部ホームページ告知開始 プレスリリース（名古屋教育医療記者会、名古屋市政記者クラブ）
2月	配布資料到着 配布資料の印刷 事前受付リスト、領収書作成 領収書（事前用・当日用）、釣り銭、金庫、経路表示板等の準備
3月	実施報告

2) 事業の実施状況

テーマ：看護本来の専門性を発揮するために ～キャリアデザインを見据えて～

講師：井上 智子（国立研究開発法人国立看護大学・校長）

日時：平成31年2月25日（月）18時00分～19時30分

場所：名古屋市立大学病院 大ホール

参加費：500円

参加者：159名（講演会関係者含む）

〈内 容〉

昨今医療機関では、医療の高度化、疾病構造の変化、入院期間の益々の短縮のみならず、経済性・効率性の重視などにより、看護師は過密な「業務」に追われている。さらにチーム医療の名のもとに、ワークシェアリング、タスクシフトなどの役割拡大や医行為の実施がこの状況に拍車をかけていることは否めない。現在、臨床現場では「業務」に多くの時間が費やされているが、看護師たちは看護本来のケアが行えないという不全感を常に抱えているのが現状である。このような状況にある今こそ、専門職としてケアするとはどういうことか、生活を支える看護とはどういうものかといった看護の原点に立ち返り、看護の専門性、アイデンティティについて議論する場が必要である。そして、このような看護の専門性を発揮するための取り組みと今後の展望について、専門看護師の育成や政策に携わってきた経験を踏まえてご講演いただいた。大学院生の研究結果や実際の事例などもまじえたわかりやすい説明が参加者にも大変好評で、今後のキャリアデザインを考える契機になった。



3) 参加者アンケート結果

参加者148名にアンケート用紙を配布し、141名からアンケートの回答があった（回収率95.3%）。参加者のほとんどは看護師115名（81.6%）であったが、看護系大学教員、学生、専門学校・看護系短大教員、保健師と本講演のテーマを反映した多職種が参加していた。講演内容について、「わかりやすかった」もしくは「どちらかといえばわかりやすかった」と答えた人は134名（95.1%）とわかりやすさについて高い評価が得られた。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・看護について振り返ることができた。
- ・大学での教育、臨床現場での経験、大学院での1年間の学習から、看護とは何か、看護の本質について考え、ほんの少しわかったような気がしましたが、これからも考え続けていきたいと思いました。
- ・学部教育から新卒ナースになる人のための考え方が勉強になった。
- ・臨床家として日々の忙しさに追われ看護の本質を問う機会が少なくなってしまったのですが、改めて自分のあるべき姿を考える機会になりました。
- ・言語化してもらった日々の看護実践が、臨床に基づいており、理論の使い方も学べた。
- ・キャリアデザインを考える機会になりました。変化が起こることを期待するよりも変化を起こす看護師になりたいと思いました。ありがとうございました。

4) 課題

本年度は、なごや看護学会が11月に開催されることとなり、本講演会は、例年より遅く2月下旬の開催とした。2月は入学試験や学部の後期試験、実習などの時期であるため、学部生や教員の参加が難しいと思われた。しかし、事前申込みは139名と例年よりも多く、学部生や教員の参加も昨年より多かった。また、当日不参加者は昨年より少なかった。関心の高いテーマであったこと、例年より暖かい時期の開催であったことが参加者数の増加につながったのかもしれない。次年度以後はなごや看護学会との共催を予定しており、なごや看護学会学術集会の開催時期に加えて、気温や日没時間などを考慮した開催日の設定が必要である。

アンケートによると来年度の講演会についての希望は、全体では「政策・看護管理」50人(35.5%)、「倫理問題」49人(34.8%)、「メンタルヘルス」33人(23.4%)の順であり、例年とは異なった傾向である。これらの結果と自由記載の意見も参考にし、来年度のテーマを選定したい。

3. 地域連携セミナー

担当：小田嶋裕輝、脇本寛子

「地域連携セミナー」は、保健医療福祉関連職種の方々や市民の皆様と連携して取り組むべき社会的な問題を取り上げている。さまざまな立場の人々が一緒に考えることで、解決の糸口や新たな方策の発見につながることを期待している事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
10月	テーマと講師の選定、講師との交渉
11月	チラシの配布先（案）の決定
1月	看護実践研究センターホームページで募集告知
2月	広報なごや5月号への掲載依頼
3月	チラシ原稿最終確認、印刷依頼（1,100部） 全学部ホームページで募集告知
4月	チラシ発送 参加者募集開始（FAX、インターネット） 参加申込者への参加の可否連絡 企画広報課へのプレスリリース依頼
5月	当日役割分担の検討 講師へ当日資料等の最終連絡
6月	名古屋教育医療記者会、名古屋市政記者クラブへのプレスリリース 準備状況、参加申し込み状況の報告
7月	事前受付リスト作成開始、領収書発行の依頼 配布資料とアンケートの印刷

2) 事業の実施状況

テーマ：相談しづらい尿のトラブル — 頻尿・尿もれ、自分だけ？ —

講師：窪田泰江（名古屋市立大学看護学部・教授）

日時：平成30年7月21日（土）13時00分～15時00分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 308講義室

参加費：500円

参加者：88名（講演会関係者含む）

〈内容〉

排尿トラブルに対する骨盤底筋体操など自宅でできるトレーニング法の体験、様々な治療法や身近に利用できる機関を紹介していただいた。充実した資料と映像、骨盤底筋体操などの体験を通して、尿トラブルに関する知識を具体的に学ぶことができた。

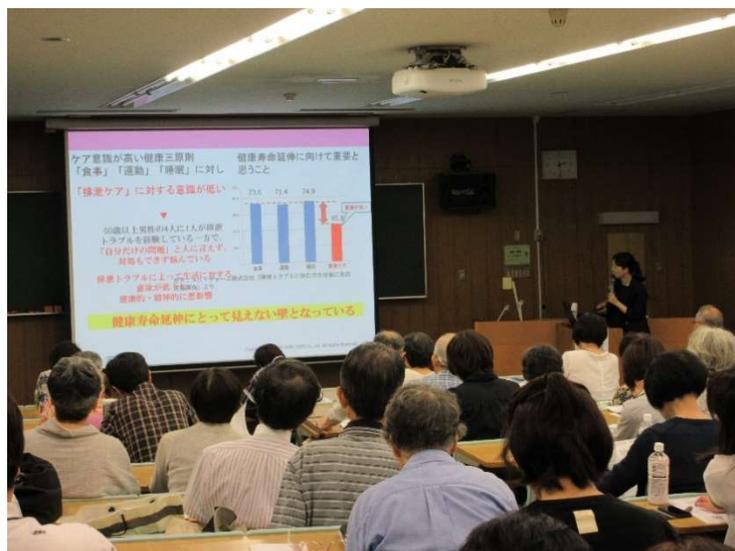
今回は、事前申し込みで満員となり、地域の皆様の関心の深さがうかがえた。

3) 参加者アンケート結果

参加者 84 名のうち、77 名から回答があった（回収率 91.7%）。参加者の一般の方の多くは無職 19 名（24.7%）、医療・福祉職の方の多くは看護職 17 名（22.1%）であり、他にヘルパー、介護福祉士、ケアマネージャーが参加していた。参加動機は「新しい知識を得る」と答えた人は 36 人（46.8%）であり、「興味関心があった」26 名（33.8%）であった。

以下に参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ 全く知識がなくてもわかりやすく説明されていたので良くわかった。
- ・ 自分の今後にも参考になりました。骨盤底筋運動をします。
- ・ 男性、女性の臓器の違いから色々な排泄支援の器具が色々ある事がわかりました。女性に関しては骨盤底筋訓練が参考になりました。
- ・ 薬だけではなく、膀胱訓練（体操）をする事で、症状が改善できる具体的な方法を教えて頂いて良かった。
- ・ 尿失禁に対してとても詳しい説明があり、スリング手術等、初めて聞いた手術法等参考になりました。男性用集尿器の件もよかったです。
- ・ 排尿日誌の見方がよくわかった。排尿障害と健康寿命の関係など、排尿がもたらす影響が大きいと感じました。排尿器具（集尿器など）の情報は役立ちます。



4) 課題

本年度の開催時期、時間、運営については、特に問題はなかった。参加者のアンケートによると来年度の講演会についての希望は、「認知症ケア」「退院支援」「メンタルヘルス」などであった。市民の皆様や保健医療福祉関連で働く皆様が何を求めているのか、いただいた意見を反映できるようにテーマを企画していく必要がある。

4. 看護研究サポート

担当：原沢優子、水野千枝子

「看護研究サポート」は、看護職者が個人またはグループで行う看護研究に対して、看護学部の教員がそのプロセスや研究成果の発表を支援することを目的としている。臨床の場にフィードバックできる科学的根拠に基づいた看護研究の推進を通して、よりよい看護の提供に貢献することを目指している事業である。

1) 事業実施の経緯

**【平成 30 年度看護研究サポート】前期 新規 3 件、継続 3 件
後期 新規 3 件 計 9 件(新規 6)**

時期	内容
4 月	研究の募集開始（案内の発送、ホームページへの掲載） 平成 29 年度実績の HP 掲載
5 月	研究の募集締め切り サポート教員の募集開始 サポート教員の募集締め切り 研究チームとサポート教員のマッチング
6 月	マッチング済み教員から順次、研究サポート開始 第 3 回運営会議にてテーマと担当教員を報告 後期募集計画の検討
7 月	研究サポート後期募集について第 4 回運営会議で提案 サポート中の受講者・担当教員からのご要望への対応を提案
8 月	サポート状況の中間確認の実施
9 月	中間確認の結果報告と不具合者対応結果の報告 後期研究サポートの募集（9 月～10 月末締め切り）
11 月	後期研究サポート教員募集 研究チームとサポート教員のマッチング 研究サポート開始（11/14～2019.9 月末） 第 7 回運営会議にてテーマと担当教員を報告
12 月	サポート教員への消耗品利用の再案内
1 月	サポート教員への消耗品利用の確認と未使用者への再案内
2 月	第 9 回運営会議にて後期研究サポートの中間確認の結果報告
3 月	看護研究サポート実績報告書の回収とまとめ（3/1 締め切り） 看護実践センター報告書提出（3/1 締め切り）

2) 事業の実施状況

今年度の4月案内に対する応募は新規3件（スタンダードコース1件、ショートコース2件）、継続3件であった。年間サポートの予定件数を満たしていないため10月にも募集し、新規3件（ショートコース3件）の申し込みがあった。名古屋市立大学病院所属が5件、外部病院が1件、コースは、スタンダードコース1件、ショートコース5件である。

当初、10月募集では、もう一件の申し込みがあり、サポートコースを決めかねていたため、サポート教員を決めて面接を行ったがその後にキャンセルとなった。

サポート教員は、研究テーマの専門性に沿って1教員に1テーマを依頼した。特筆する問題はなく、概ね順調にサポートが実施された。まず、8月、2月の各中間調査においては、順調に進んでいるとの返答であった。前期分の最終報告では、継続サポートの1件で一度もサポート実施がなかったことが判明し、受講者らへの確認を行い、サポート終了を確認した。他の継続1件は後期に新たな申し込みとなり、残り1件は終了となった。新規の受付1件に継続希望があり、他2件は院内発表などにつながり終了となった。

サポート教員のサポートにかかる経費は、すべて執行された。

研究成果の広報について、昨年度の実施終了者から公表の承諾があった2件をHPで公開する予定である。

3) 課題

名古屋市立大学病院以外のサポート受講料金の受け渡し体制において、教員は初回面接日が確定したら、事務局に連絡することになっているが、それが徹底されずに初回面接後にキャンセルになった1件があった。該当者へは、メールと案内紙面の両方に記載して説明をしているが、徹底できない現状がある。また、申し込み時点でコースを決めかねている場合は、スタンダードコースを推奨する方針がよいと思われる。

昨年度の実施不足により継続とした案件3件のうち、2件は実績がなかった。サポート教員の不足につながりかねないため、未実施分の継続を行うか検討の必要がある。

5. 昭和生涯学習センター共催講座

担当：小川雅代、宮内義明、明石恵子

「昭和生涯学習センター共催講座」は、昭和区との共催で行っている事業であり、本年度で4回目である。市民は大学という普段入ることの出来ない場で、専門的で先進的なことを低額で学ぶことができ、大学としては、学生以外にも学びを提供するという地域貢献ができる事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
5月	昭和生涯学習センター担当者との講座開催方法検討 (実務は指定管理者である名古屋市教育スポーツ協会が担当)
6月	テーマと講師の選定、講師との交渉開始 テーマ、講師、開催日時決定
7月	広報、参加者募集開始(名古屋市教育スポーツ協会担当者)
9月	講師への依頼書発送(名古屋市教育スポーツ協会担当者)
1月	昭和生涯学習センター担当者と共に使用教室などの最終確認
3月	看護実践研究センターホームページに開催報告掲載 全学ホームページに開催報告掲載

2) 事業の実施内容

平成30年度後期昭和生涯学習センター事業として、「いつまでも健康でいきいきと！～自分に合った元気のヒント見つけましょう～」をテーマとする全4回の講座を実施した。第1回は公開講座であり、参加者は84名であった。2回目以後は有料(受講料：900円)で、応募者84名から抽選で50名の受講者が選定された。

開催日時	内容	講師
1月25日 14:00-16:00	からだの機能の変化と生活上の注意	薊隆文 (名古屋市立大学看護学部・教授)
2月8日 14:00-16:00	からだの健康づくり① ～食生活のヒント～	小田嶋裕輝 (名古屋市立大学看護学部・講師)
2月15日 14:00:16:00	からだの健康づくり② ～運動のヒント～	原沢優子 (名古屋市立大学看護学部・准教授)
2月22日 14:00-16:00	こころの健康づくり ～ストレス対策のヒント～	小川雅代 (名古屋市立大学看護学部・講師)

3) 参加者アンケート結果

主催者である昭和生涯学習センターが実施した参加者アンケートの主な結果は、以下の通りである。

第1回公開講座については、参加者84名にアンケート用紙を配布し、79名から回答があった（回収率94.0%）。講座の内容について「たいへんよかった」もしくは「まあまあよかった」と答えた人が72名（85.7%）と高評価であった。参加者の感想の一部を掲載する。

- ・プリントをもとに、専門的な内容も大変参考になり分かりやすかった。
- ・健康を保つには、日常生活の中で運動が必要であることがよく理解できました。少しでも実行できるようにしたいです。
- ・麻酔学の先生の話は、初めてですが、とても理解しやすく、平易な話し方と言葉使いで楽しい2時間でした。学生時代にこのような教授に出会えていたらと思いました。

第2～5回目までの連続講座については、最終日の参加者44名にアンケート用紙を配布し、全員から回答があった（回収率100%）。講座の内容、講師の指導、講座全体の満足度についてほぼ全員が「たいへんよかった」もしくは「まあまあよかった」と回答し、高評価であった。参加者の感想の一部を掲載する。

- ・今後の自分の健康管理にとっても役立った
- ・とても分かりやすく資料も充実していてよかった。
- ・全体を網羅し、分かりやすく実生活に即した内容だった。



4) 課題

昭和生涯学習センターの担当者から、今後も共催講座を継続したい旨の申し出があった。市民のニーズに合ったテーマを選定するとともに、看護学部教員の専門性を活かした講座となるよう協力して実施していきたい。

Ⅲ 今後の課題

名古屋市立大学看護学部は学部設立 20 周年を迎えたことを契機に、平成 31 年 4 月から大学院重点化することとなった。これにより教育・研究の充実は言うまでもなく、本センターが担う社会貢献事業の推進も大いに期待されている。

一方、名古屋市立大学看護学部と名古屋市立大学病院看護部が中心となり、名古屋市内の病院、訪問看護ステーション、保健所などの保健医療福祉機関や教育機関とともに平成 30 年 4 月になごや看護学会を設立した。名古屋市民の健康生活の向上に寄与するという点で、学会設立も大きな社会貢献である。

このような名古屋市立大学看護学部・名古屋市立大学病院看護部の状況をふまえ、本センターは、なごや看護学会との連携・協働による社会貢献事業の拡充を考えている。これまでのノウハウを基盤になごや看護学会に参画する施設の協力を得て、教育研究成果の還元や地域・行政の課題解決、生涯教育の推進などに尽力する所存である。その手始めとして、平成 31 年度は、なごや看護生涯学習公開講演会を共同開催する予定であり、本センターとなごや看護学会の連携のあり方とそれぞれの役割を明確にすることが大きな課題である。

また、看護学部紀要の終了に伴い、看護学部教員の研究成果等をなごや看護学会誌で公表していただきたいと思うが、全教員がなごや看護学会に入会しているわけではない。看護学部教員であれば誰でも投稿できた紀要と異なり、なごや看護学会誌に投稿するためには学会に入会する必要がある。名古屋市立大学看護学部と名古屋市立大学病院看護部の社会貢献活動を推進するためには、なごや看護学会の会員増加と学会誌への投稿促進にも本センターが関与していく必要があるだろう。

平成 30 年度看護実践研究センター運営委員会

センター長 明石 恵子 (名古屋市立大学看護学部)
運営委員 小川 雅代 (名古屋市立大学看護学部)
小田嶋裕輝 (名古屋市立大学看護学部)
杉浦 和子 (名古屋市立大学看護学部)
原沢 優子 (名古屋市立大学看護学部)
益田美津美 (名古屋市立大学看護学部)
水野千枝子 (名古屋市立大学病院看護部)
宮内 義明 (名古屋市立大学看護学部)
吉松 由子 (名古屋市立大学病院看護部)
協本 寛子 (名古屋市立大学看護学部)
事務職員 小林真理子

名古屋市立大学看護学部看護実践研究センター

〒467-8601

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1 番地

TEL&FAX 052(853)8042

<http://www.nagoya-cu.ac.jp/nurse/center/>